



超少子高齢社会を  
乗り切る方法は  
地域包括ケア以外にない！  
「ごちゃまぜ」で  
進める地域共生社会

ます。これらの解釈は私の勝手なもので、国語学的根拠はまったくありません。

今後、急速な人口減少と少子高齢化の中で、高齢者だけでなく、様々な人が人との繋がりを失い、社会的に孤立するおそれがあります。特に、

前回は、「地方創生とごちゃまぜ」のお話をしました。人口減少と少子高齢化に立ち向かい、地方創生を進め、東京と地方の共存共栄を図っていくためには、地域経済の活性化、地域生活の確保、地域文化の振興を「ごちゃまぜ」で進めていくことが必要です。

私たちの生活は多面的です。仕事も生活も文化も皆大事なのです。国の政策は、1つの面に焦点をあてて

制度を設計せざるを得ませんが、現場でそれを実施する時には、多面的に他の様々な生活の部分との関係を考えていくことが重要です。

私は、「ごちゃまぜ」であることが、同じものばかりそろっているよりも自然だと思っています。同じものばかりそろえるのは、結晶構造のようなものです。この構造は、定まった1つの環境に対応する時にはとても効率がよいのですが、現実世界の多様で曖昧で始末変化する環境に適応するには、不向きな気がします。

それから、同じものばかりそろっているよりも、いろいろなものがあり、いろいろな人がいる「ごちゃまぜ」の方が、知的な刺激も多く楽しいと思います。そして、この「ごちゃまぜ」の多様性と相互作用が、イノベーションを生み出すと思います。

大都市では地縁が薄く、孤立しやすい。孤立すると、生活困難、生きがいの喪失や健康状態の悪化ということにつながりやすくなります。超少子高齢社会に向かって、「孤立をどう防いでいくのか」ということは、地域包括ケアと地方創生の重要な課題です。

20世紀は、同質性と効率化の時代でした。工業化と大量生産が進み、大規模施設も作られました。しかし、私は、21世紀は多様性と高付加価値化の時代ではないかと考えています。そこでは、高齢者も子どもも、若者も働き盛りの世代も、認知症の人も障がいのある人もない人も、引きこもりの人も、多様なあらゆる人々を「ごちゃまぜ」にして、自然に楽しく、相互作用を促してその力を引き出し、元気と活気

私は、「ごちゃまぜ」と「ごちゃご

ちゃ」は違うと思っています。いろいろなものが無秩序にたくさんあるだけなら「ごちゃごちゃ」、いろいろなものが、それをかき混ぜて交流させ、相互に化学反応が生じて新しいものが生まれるのが「ごちゃまぜ」だと思っています。だから、「ごちゃごちゃ」はカオス（混沌）ですが、「ごちゃまぜ」はカオスではありません。辞書にはそんなことは全く書いてありませんが、「ごちゃまぜ」からは、雑木林のような自生的な秩序が生まれてくるのではないかと私は勝手に考えています。「ごちゃまぜ」は、童謡詩人金子みすゞの「みんなちがって、みんないい（わたしと小鳥とすずと）」のような気もするし、SMAPの「オンリーワン（世界に一つだけの花）」のような気もしてき

のある地域、あらゆる人に開かれた地域を作っていきます。「多様性（Diversity）」×「相互作用（Interaction）」＝「ごちゃまぜ」。私は、これを「吉田⇨雄谷⇨竹林の『地域包括ケアとごちゃまぜの法則』と呼んでいます。「ごちゃまぜ」には、孤立を防ぐ力があるのではないかと考えています。「吉田」は吉田一平長久手市長、「雄谷」は雄谷良成社会福祉法人佛師園理事長、「竹林」は竹林洋一静岡大学教授です。次回、詳しくお話しします。



### Profile

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授。  
1956年長野県安曇野市生。1980年早稲田大学政治経済学部卒業。同年厚生省に入省。2014年厚生労働省保険局長、2016年6月内閣官房まちひととし創生本部地方創生総括官。同年8月に退職、12月から現職。